

# 相談援助演習の地域福祉実践における学生変化・教育評価に関する研究

社会福祉法人みのり会と十人町一の組自治会の防災避難訓練への参加を通して

大杉 あゆみ・飛 永 高 秀・尾 里 育 士  
栗 原 拓 也・吉 本 知江子・松 永 公 隆  
山 頭 照 美

A Study of Changes in Students and the Educational Effects of Community Social Work  
Practice for Social Worker's Practical Seminar

Through the Participation in a Disaster Drill conducted by the Social Welfare Corporation Minorikai  
and Community Associations in Itinokumi Zyunin-machi Nagasaki City

Ayumi OSUGI, Takahide TOBINAGA, Yasushi OZATO,

Takuya KURIHARA, Chieko YOSHIMOTO, Kimitaka MATSUNAGA,

Terumi YAMAGASHIRA

## 要 約

本研究の目的は、社会福祉士養成課程の相談援助演習における学生の「地域福祉」への理解につながる教育内容について検討することである。

本学において相談援助演習を受講した学生に対し、授業で実施したフィールドワークを中心とした活動に関する質問紙調査を実施し、活動を通じた地域福祉の捉え方の変化に関する自由記述の回答について、学生の学びの変化に焦点を当て質的に分析を行った。

その結果、9つの学生の変化を表すカテゴリー「参加・体験することによる学び」「地域の現状の理解」「地域の在り方への理解」「地域づくりに対する理解」「福祉専門職としての視点」「あいまいな『地域福祉』」「『地域福祉』の捉え方の変化」「地域に目が向かなかった私」「生活者としての私の変化」に分類できた。

分析結果から、相談援助演習の活動を通して、学生が自分の住む地域への無知へ気づき、自ら内発的に地域に対する関わりについて意識化できたことが見出された。

**キーワード：**相談援助演習 地域 地域福祉 フィールドワーク

## 1. 研究の背景・目的

2007年12月5日に「社会福祉士及び介護福祉士法」が改正され、これに伴い社会福祉士養成教

育が新たなカリキュラムに変更された。

「相談援助演習」の教育内容について、社団法人日本社会福祉士養成校協会演習教育委員会による『相談援助演習のための教育ガイドライン（案）』では、教育に含むべき事項として、ア～キの7項目が提示されている。この中で地域福祉に関する項目は、「キ：地域福祉の基盤整備と開発に係る事例を活用し、次に掲げる事項について実技指導を行うこと」とされており、次に掲げる事項とは、①地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握、②地域福祉の計画、③ネットワーキング、④社会資源の活用・調整・開発、⑤サービスの評価である。

しかし、「地域福祉」を相談援助演習の授業中に学生に伝え、学びを深めさせることは容易ではない。なぜなら、「地域福祉」という概念があまりにも広く抽象的であるため、生活経験等が乏しく、地域との関わりが浅い学生には理解することが難しいからである。また、教える教員側も教室の中で新カリキュラムの教育内容に含まれている上記の「地域福祉」について、具体的かつ実践的に教授することは難しいと思われる（飛永 2015）。

これらの背景から、筆者を含む共同研究グループは、今後の相談援助演習の「地域福祉」に関する教育内容等の検討を行っていくために、社会福祉士養成の相談援助演習を担当している教員に対し、相談援助演習の「キ：地域福祉の基盤整備と開発に係る事例を活用し、次に掲げる事項について実技指導を行うこと」の教育内容が具体的にどのように実施されているのか等のインタビュー調査を実施し、質的に分析を行った。この結果、「地域福祉」の理解につながる教育実践における課題が見出され、①養成校の位置づけに関するもの、②専門職養成における教育カリキュラムに関するもの、③教員の専門性や教授法に関するもの、④産学官の連携・協働の必要性、⑤学生の生活経験と社会参加・貢献の5つのカテゴリーに整理できた。これらの課題については、すぐに解決することは難しく、相談援助演習の教育実践を蓄積しながら、体系的な授業展開を構築することが求められる（飛永 2015）。

しかし、これはあくまで教授する立場にある教員の視点である。学生の「地域福祉」への理解につながる教育内容を展開していくためには、実際に授業を受講した学生に対し調査を実施し、その考察を授業内容や教育方法に反映させていくことが必要だと考えた。本稿では、これらの調査に取り組んだ結果について、その一部を報告したい。

## 2. 本学の相談援助演習における「地域福祉」への理解の取り組み

まず、本学の相談援助演習における「地域福祉」への理解への取り組みについて紹介したい。

本学の2014年度の相談援助演習Ⅳは、以下に示す内容で行った（表1）。

2014年度の相談援助演習Ⅳでは、昨今の自然災害による被害を鑑み、県内でも先駆的に地域全体で防災に取り組んでいる長崎市十人町一の組自治会と、十人町に拠点を置く社会福祉法人みのり会（以下、「みのり会」）に全面的なご協力をいただき、「地域で共に生きること」について、防災を通して理解することを目的とし、授業計画の段階から、十人町一の組自治会及びみのり会

表1：2014年度 相談援助演習Ⅳの授業内容

回	日程	形態	時限	内容
1	4 / 9	全体	Ⅱ	オリエンテーション
2	4 / 16	クラス	Ⅲ	十人町に関する事前学習 講師：社会福祉法人みのり会 十人町一の組自治会の皆さん
3	4 / 19 (土)	学外	Ⅱ	十人町フィールドワーク①十人町の理解
4			Ⅲ	十人町の理解
5			Ⅳ	防災訓練体験
6			Ⅴ	防災訓練体験
7	5 / 24 (土)	学外	17:00 ~ 21:00	十人町フィールドワーク②
8				避難所避難体験
9				
10	6 / 4	グループ	Ⅲ	十人町フィールドワーク報告書作成・発表準備①
11	6 / 11	グループ	Ⅲ	十人町フィールドワーク報告書作成・発表準備②
12	6 / 18	グループ	Ⅲ	十人町フィールドワーク報告書作成・発表準備③
13	6 / 25	グループ	Ⅲ	報告会リハーサル
14	7 / 2	グループ	Ⅱ	フィールドワーク報告会
15		全体	Ⅱ	

のソーシャルワーカーとすりあわせを行いながら表1に示す授業計画を立案した。

まず、実際に十人町で活動を行う前に、十人町一の組自治会会長、みのり会の職員2名に來学いただき、十人町一の組の基本的情報、現状と課題等について講義を受け、十人町一の組自治会に関する理解を深めた。

その後、学外授業として、学生が実際に十人町を訪問し、白地図を元に町内を実際に歩き、福祉マップの作成を行った。そして、高齢者疑似体験セットを装着した学生が地区指定の避難所まで避難し、また、簡易担架や移送を補助する器具である「ほいさっさ」を実際に使用する等して、避難体験を実施した。

以上のような講義と演習によって、十人町一の組自治会に関する知識と、地域の現状を演習による体験を通して知ったうえで、5月24日に実施された十人町一の組避難訓練に実際に参加させていただいた。学生は、「総本部」、「避難所運営」、「情報発信」、「救護」、「食事・衛生」5つの班に分かれ、各班のリーダーである十人町一の組自治会の方々の指示に従って動き、夕方から夜間にかけて避難訓練を体験させていただいた。

避難訓練後の授業においては、学内で各グループ毎に体験し理解した内容をまとめ、報告書の作成に取り組んだ。授業の最終回には、これまでの活動に多大なご協力をいただいた十人町一の組自治会の皆さんとみのり会職員2名に参加いただき、大学においてフィールドワーク報告会を実施し、今回の活動のまとめとした。



避難支援の体験をしている学生と、避難所における炊き出しの体験を行う学生の姿

### 3. 学生に対する質問紙調査

#### 1) 調査概要

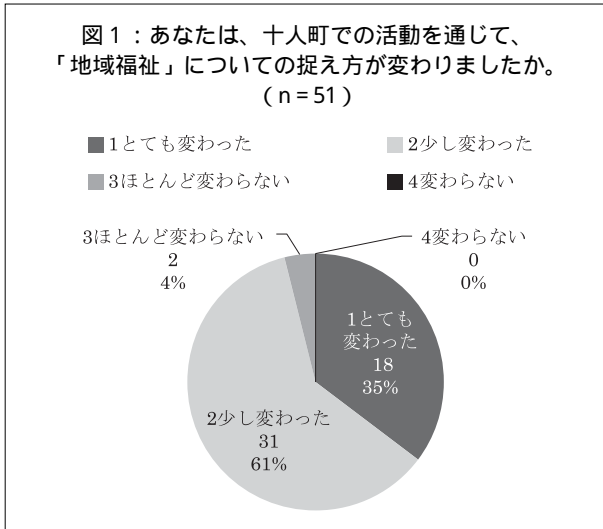
本学の2014年度の相談援助演習Ⅳ(表1)の授業を受講した学生に対し、質問紙調査を実施した。2014年度は相談援助演習Ⅳ(前期)・相談援助演習Ⅴ(後期)の科目に「地域福祉」に関する内容を組み込んでいた。そのため、この2科目の受講学生を調査対象とした。

調査は、後期の相談援助演習Ⅴの授業最終回である2015年1月28日のⅡ限に実施した。前期の相談援助演習Ⅳと後期の相談援助演習Ⅴについて、学生に振り返ってもらい回答してもらった。ただし、相談援助演習Ⅳは前期の授業であるため、学生が前期に行った活動を想起できるよう、教員が相談援助演習Ⅳの授業内容の簡単な説明を行った。また、調査用紙にも活動内容について簡潔な記載をした。

質問紙の配布と回収においては、本研究会のメンバーが相談援助演習の担当者であるため、研究メンバーで行った。

調査の対象者は、相談援助演習Ⅳ・Ⅴ受講者はそれぞれ3年生46名、4年生16名の計62名のうち、当日授業に出席していた51名である。調査の説明は、当日の授業内に教員が行った。学生に対して、調査用紙は無記名とし個人が特定されないこと、成績評価には反映させないこと、これに対し同意できる者が回答するよう説明を行った。

質問項目は、①相談援助演習Ⅳの十人町における防災訓練体験を通じた「地域福祉」について



の捉え方の変化と、②相談援助演習Vの大学周辺地域における活動を通じた、「地域で生活すること」等について、意識の変化に関する計6項目である。

質問を上記の内容にした理由は、これまでの「地域福祉」に関する本学の演習教育において、「地域福祉」や「地域で生活すること」等の意識の変革が、学生にとって重要であり、しかし、同時に、授業を担当する教員にとっても、伝えていくことの難しさを強く感じていた内容だからである。

回答は、「とても変わった」「少し変わった」「ほとんど変わらない」「変わらない」の4件法とした。また、それぞれの問いの後に、その理由を尋ねた自由記述の欄を設けた。相談援助演習IV・Vの授業を通して、「地域福祉」の捉え方の変化と、「地域で生活すること」についての意識の変化について振り返ってもらった。この調査は本研究のためであるが、同時に、学生が自分自身の学びや意識の変化を言語化するという教育的なねらいも含まれている。

なお、本稿では、紙面の都合等により、相談援助演習IVに関する質問項目①と、これに続く自由記述のみの分析結果を掲載し、言及していきたい。

## 2) 結果

### (1) 質問項目①の調査結果

質問項目①は、「あなたは、十人町での活動を通じて、『地域福祉』についての捉え方が変わりましたか」という問である。「とても変わった」が18名で全体の35%、「少し変わった」が31名で全体の61%、「ほとんど変わらない」が2名で全体の4%、「変わらない」が0名となった(図1)。

まず、「とても変わった」に回答した理由に関する自由記述には、十人町での活動を通して、自分の住む地域や身近な地域にも関心を持ち、目を向けることが出来るようになったという意見が多く、地域住民のつながりや支え合いの重要性を感じたという意見も多かった。

次に、「少し変わった」に回答した理由に関する自由記述では、地域に実際に出向き活動を行うことで学んだことが多かった、住民が主体的に活動していくことの重要性に気付いたという意見、地域と地域に存在する社会福祉施設との協働と、関係を形成していくことが求められていることに気付いたという意見が多かった。

「ほとんど変わらない」を選んだのは51名中の2名のみだった。自由記述には、「社会福祉施設と地域住民の連携の在り方は少し知ることができたという認識のため」、「学内での学習で得た知識等を現場実践という形で地域福祉学習が完成されたというふうに捉えていました。認識の変

化というよりも、曖昧な輪郭がはっきりと目視できたという印象です」と回答していた。

## (2) 自由記述の分析とその方法

「ほとんど変わらない」の2名以外の学生が、「とても変わった」「少し変わった」と回答しており、相談援助演習Ⅳを受講した学生の大多数が、活動を振り返り、何らかの変化があったと感じていた。

各回答に関する自由記述を深く読み込んでいくと、学生が、「活動を通して何に気付き、何を学んだのか」について振り返り記述していると理解することができた。そのため、これらの自由記述の内容を分析していくことは、本学の相談援助演習教育の実践内容を考察していくことにつながるものと考えられた。よって、「とても変わった」「少し変わった」「ほとんど変わらない」のいずれかに回答したかを区別することなく、これら全ての自由記述をまとめて質的に分析することとした。なお、分析は共同研究グループメンバーで行った。

分析は、49名分の自由記述の内容を質的に分析した。具体的には、まず、自由記述の回答を何度も読み返し記述一つ一つに見出しをつけながら、内容の似通ったものでグループ化しようと試みた。しかし、一人の学生の意見の中に複数の内容が含まれている場合も多くあり、見出しを一つずつつけることは困難であった。

そのため、まずは、自由記述を読み、複数の内容が含まれているものは意味合いごとに記述を切り分け、全ての記述を意味合いごとのカードに切り分けた。カードは、全部で94枚となった。これらのカードについて、内容の近いものをグループ化していく作業を行った。

## (3) 自由記述の分析結果及び考察

自由記述の内容を、学生が「活動を通して何に気付き、何を学んだのか」という視点で分析した結果、以下のようにグループ化され、16個のサブカテゴリー、9個のカテゴリーが生成された。表2にそれらをまとめ、カテゴリーごとに説明、考察を行う。

### ① 参加・体験することによる学び

このカテゴリーは、「実際地域に出て住民の方々とコミュニケーションを図ることができたので、地域活動の様子を知ることができた」「当事者の方々が不便に思っている点を口頭での説明のみでは私たちにその不便さが伝わりにくいが、実際に自分たちが地域に出てみて、坂道が多く急で歩行が困難であったり、避難所が高台にあり移動に時間がかかるなど、アウトリーチの重要性を知ることができた」などのカードでまとめられた。学内における机上の学習だけではなく、地域に学生が出て行き、自分が直接体験し交流を持つことを通し学ぶことの意義について述べられている。このカテゴリーには、サブカテゴリーは構成されなかったが、カード数も多く、一つのカテゴリーとしてまとめた。

## ② 地域の現状の理解

学生は事前に十人町についての講義を受けていたが、直接自らが出向き見聞きすることで、十人町には坂が多く、高齢者等の身体が不自由な住民にとっての生活しづらい現状などについて、身をもって感じる事ができたというカード記述がみられた。このカテゴリーからも、「1.参加・体験することの学び」につながる学生が直接地域に出て体験することの重要性が見出された。このカテゴリーからもサブカテゴリーは構成されなかった。

## ③ 地域の在り方への理解

このカテゴリーは、「住民同士のつながり」、「住民の主体性」、「住民の支え合いと協力」、「災害時の助け合い」の4つのサブカテゴリーから構成される。

「住民同士のつながり」は、自分たちが参加した十人町一の組自治会の防災訓練をはじめとする地域活動が、住民のつながりを形成していることの気付きや、なじみの関係を自治会内、近隣で作っていくことの必要性などを理解したことを示している。

「住民の主体性」は、学生は十人町一の組自治会の活動の様子や交流を通して、自治会の方々の、自分たちの力で地域を良くしていきたいという強い思いを感じ取っている。これまで学内の講義において、地域福祉における「住民主体」の必要性は学んできたものの、今回の防災訓練への参加を通して初めて、「住民主体」ということを実感することができたようである。

「住民の支え合いと協力」では、活動の中で、自治会の方々が限られた資源の中で工夫し支え合って生活されていると感じ取り、また、今回参加させていただいた防災訓練の活動自体も、住民の力、協力がなければ成立しないものであることから、住民の理解や協力し合うことの重要性を理解することに結びついている。

「災害時の助け合い」では、実際の防災訓練に参加して、「災害時など万が一に助けてくれるのは、やっぱり近隣の人たちだと思ったから。」「防災避難訓練等を行わせていただき、地域住民同士の助け合いがあって、避難することができ、地域の助けがないと避難することが難しい方も多くいることがわかりました」等のカードがあり、これらでひとつのまとめりとした。災害時における地域の助け合いの必要性、そのために毎日頃から自治会や近隣でつながりを形成しておくことの重要性について学生は気付きを得ている。

これらの4つのサブカテゴリーをまとめ、「地域の在り方への理解」とした。学生は、活動を通して「住民同士のつながり」「住民の主体性」「住民の支え合いと協力」「災害時の助け合い」の必要性を感じ、十人町一の組自治会の在り方を感じることで、地域福祉の視点において、地域がどのようにあるべきなのかということ初めて自ら考えることができたようである。

## ④ 地域づくりに対する理解

これは、「3.地域の在り方への理解」からつながるカテゴリーである。十人町一の組自治会とみのり会が支え合い地域生活を送っている事実から、「このように地域をつくっていくことが

表2：学生の地域福祉の捉え方に関する自由記述の分析表

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的なカード記述（抜粋）
参加・体験することによる学び		<ul style="list-style-type: none"> <li>○実際に地域に出て、住民の方々とコミュニケーションを図ることができたので、地域活動の様子を知ることができたから。</li> <li>○住民の方たちが実際にどう思われているかを直接聞くことで自分との考えの違いがあったり、フィールドワークを行うことで改めて考えることが多く合った。</li> <li>○それぞれの地域に特色があり、行ってみなければ分からないことが多いと気付いた。</li> </ul>
地域の現状の理解		<ul style="list-style-type: none"> <li>○十人町での活動を通して、十人町の特徴（坂が多い、高齢者が多い）や、そこでの住民の暮らしについて知り、課題等が見つかった。</li> <li>○活動を通して、避難場所があるがその場所まで行くことが難しい現実を知り・・・</li> </ul>
地域の在り方への理解	住民同士のつながり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の活動が人々のつながりを作っていく。</li> <li>○十人町での活動を通して、声かけをお互いにし合う大切さなどの人とのつながりを感じ取れたから。</li> <li>○顔なじみの関係を結ぶことによって、小さな変化にも即時に対応することができるかもしれないと思うようになった。</li> </ul>
	住民の主体性	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域住民が主体的に取り組むことで変わっていくものだと実感したから</li> <li>○十人町で活動をさせて頂き、自治会の方々をはじめとして、住民の方が主体となって、自分たちが住む地域をより良いものにしていこうという姿を見ることができた。</li> </ul>
	住民の支え合いと協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○住民が様々な工夫をして支え合い生活していることを実感できた。</li> <li>○活動を通して、防災訓練などをする際にも、住民の力、協力が必要だと理解できた。</li> <li>○地域一人ひとりの力が必要だと捉え方が変わった。</li> </ul>
	防災時の助け合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○防災避難訓練等を行わせていただき、地域住民同士の助け合いがあったので非難することができ、地域の助けがないと避難することが困難な方も多くいることが分かった。</li> <li>○自治会や近所の方々の連携や日頃からのつながり、コミュニティーというものの重要性が防災時などに影響してくると感じたから。</li> <li>○災害など万が一の時に助けてくれるのは、やっぱり近隣の人達だと思ったから。</li> </ul>
地域づくりに対する理解		<ul style="list-style-type: none"> <li>○防災活動が積極的になされている自治会を知ること、こんな風に地域をつくっていくこともできるのだと・・・。</li> <li>○（住民が）交流を持つことで、もっといい地域にしようという同じ目標、理想の町というのを描くことができると学び得た。</li> <li>○子どもからお年寄りまでたくさんの様々な方が生活している場で、皆が暮らしやすい生活とはどのようなことが考えさせられたため。</li> </ul>
福祉専門職としての視点	関わり・介入の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>○演習を通して、自治会の現状や取り組みについて考えることで、まず地域でのつながりを作るきっかけ、問題の対処としてどのような方法をとることができるのかを考えることが、自分の中でできているのかなと感じています。</li> <li>○地域福祉は、地域住民以外の私たちが多様に関わらせていただくことも重要であることに気づかせて頂いた。</li> </ul>
	ネットワークの形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人と人とのつながりや、地域で生活している方、施設や専門職の方々、自治会の方々など、いくつものネットワークが形成されているということが分かった。</li> </ul>



	地域と施設のつながり	<ul style="list-style-type: none"> <li>自治会の方々や施設の方々と実際に関わり、非難活動をしていく中で、地域で安心して生活していくために支え合っていることを学んだから。</li> <li>施設と地域住民とのつながりについても学ぶことができ、施設も地域の一員となれることを知ることができた。</li> </ul>
あいまいな「地域福祉」	漠然とした理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域福祉は、地域をよりよくするものだという漠然としたものだった。</li> <li>福祉と聞くと、高齢化やバリアフリーのことをよく想像し、それが地域福祉の全体像であるかのように考えている面がありました。</li> <li>今までの授業において地域福祉というテーマについて深く考えたことがあまりなく、地域福祉についてのイメージが抽象的であった。</li> </ul>
	専門職主体の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域福祉は社協や役場などの取り組み次第で変わるものだと思っていた。</li> <li>地域福祉とは、福祉職が全て行うものだと思っていた。</li> </ul>
「地域福祉」の捉え方の変化	地域福祉への関心と具体的な理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に地域に行って活動をしたと考えており、活動を通して地域福祉の捉え方が依然あまり興味がなかったのですが、興味を持つようになった。</li> <li>認識の変化というよりも、あいまいな輪郭がハッキリと目視できたという印象です。</li> <li>漠然としていた地域福祉について、自分の将来をも含めて考えることができた。</li> </ul>
	地域福祉の個性	<ul style="list-style-type: none"> <li>十人町での人々の繋がりや、「ほいさっさ」等の特有の福祉のあり方に触れることができ、地域福祉にも個性があることを改めて感じる機会となりました。</li> </ul>
	関わり続けるもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>十人町での活動を通じて、地域の方々とのつながりや、そこで生活をする上で、地域福祉は生涯関わりのあるものだと感じました。</li> </ul>
地域に目を向けていなかった私		<ul style="list-style-type: none"> <li>普段は、地域で生活しているという意識は全く持たないので・・・</li> <li>まず、私は十人町での活動を行うまで自分の地域の避難場所も知らなかったし、知ろうとも思っていませんでした。</li> <li>これまで自分自身の地域の福祉について深く考えたことがありませんでした。</li> </ul>
生活者としての私の変化	自分の地域への関心の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の地域はどうか、自分の身内の地域はどうかと身のまわりの福祉というものにも目を向けるようになった。</li> <li>十人町での活動を通して、私が生活している地域の希薄化を実感することができた。</li> <li>演習を通して、自分が住んでいる地域の現状や課題についても目を向けることができた。</li> </ul>
	防災への意識の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の住んでいる地域では、そのような訓練がないので、もし災害があった時の対応はどのようにするのかと考えさせられました。</li> <li>(避難所は)自分の地域ではどうなっているのか。</li> </ul>
	支えられていることへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が地域で支えられて生活しているということが改めてよく分かった。</li> </ul>
	私たちにできること	<ul style="list-style-type: none"> <li>私たちにできることは何か・・・</li> <li>また、そういった地域にできることはないか考えるようになりました。</li> <li>若い人たちが地域の中で活躍できるような取り組みを考える機会になったからです。</li> </ul>

できる」という新たな気づきや、住民同士が交流を持つことで、良い地域にしようという同じ理想や目標を抱くことができること、そのためにも地域における活動が欠かせないものであることの気づきを得、全ての年代の、また障害のあるなしに関わらず、誰もが暮らしやすい町をつくることについて、具体的ではないかもしれないが、思いを巡らすことはできたようである。

#### ⑤ 福祉専門職としての視点

次に、「福祉専門職としての視点」カテゴリーである。このカテゴリーは、サブカテゴリー「関わり・介入の方法」「ネットワークの形成」「地域と施設のつながり」から成る。

「関わり・介入の方法」は、地域福祉を考える際には、地域住民以外の福祉専門職も多様に関わっていくことも重要であること、住民の現状を把握した上で、必要なサービス等を検討するためにソーシャルワーカーが介入することの必要性についての記述カードをまとめた。また、活動への参加や、その振り返りを通して、地域における住民のつながりを作る機会を設定することや、問題の対処方法などを、福祉専門職の視点で考えてみるができるようになったというカードも見られ、学生が、地域の課題を「地域福祉」の視点から捉え考えようとしていることが示された。

「ネットワークの形成」では、十人町一の組自治会とみのり会の協同の様子から、自治会内のつながりや、自治会とみのり会の利用者や職員との関係性など、幾つものネットワークが形成されている現状の理解、様々な福祉専門職が調整し、多方面から介入していくことで、生活しやすい環境を整えていくことができるという学びを得ている。

「地域と施設のつながり」は、比較的多めの8枚のカードから生成され、事前の講話を通して、また実際に自治会とみのり会が協同して防災訓練を実施されている場面に直接触れることで、自治会と社会福祉施設が地域で安心して生活するために支え合っているということを理解している。防災訓練以外にも、地域の行事等に共に取り組むこと等からも、地域にある社会福祉施設は自治会と協力する姿勢が必要であることを学んだようである。

また、「施設と地域住民とのつながりについても学ぶことができ、施設も地域の一員になれることを知ることができた」というカードもあるように、それぞれの学生がこれまで社会福祉施設でのコミュニケーション体験学習や、相談援助実習をはじめ各種実習を体験しているが、施設を地域と切り離して捉えていることが多く、地域の中にある施設という捉え方がこの時初めてできた学生もいたのではないだろうか。多くの学生が将来、社会福祉施設に就職していくことを考えると、「施設は地域の一員である」という意識を持つことは、大きな意味があると思われる。

#### ⑥ あいまいな「地域福祉」

サブカテゴリーである「漠然とした理解」「専門職主体の活動」を一つにまとめたのが、「あいまいな『地域福祉』」カテゴリーである。これは、学生のこれまでの「地域福祉」の捉え方を示したカードをまとめたカテゴリーである。

カテゴリーの中には、「地域福祉」とは、地域をより良くするものであるという漠然としたものだったことや、これまで「地域福祉」というテーマで深く考えたことがなく、イメージが抽象的だったというカードが集まり、これを「漠然とした理解」としてまとめた。

また、「地域福祉とは、福祉職が全て行うものだと思っていた」「地域福祉は社協や役場などの取り組みで変わるものだと思っていた」などのカードをまとめ、「専門職主体の活動」サブカテゴリーとした。

#### ⑦ 「地域福祉」の捉え方の変化

防災訓練活動への参加を通して、以前は地域福祉に興味を持たなかったが、関心を持つことができるようになったという記述や、これまで漠然としていた地域福祉について、「あいまいな輪郭がハッキリと目視できたという印象です」というカード記述があり、これらの意味合いのカードをまとめ、「地域福祉への関心と具体的な理解」サブカテゴリーとした。

また、十人町一の組自治会の活動に参加させていただき、事前の講義等も含め詳しく学ぶうちに、十人町一の組自治会の地域の在り方にも特色があるように、地域福祉はその地域ごとに特色や個性があるという捉え方をしたカードがあり、それを「地域福祉の個性」サブカテゴリーとした。

学生は、地域で生活をするあらゆる年代の人に、地域福祉が関わっていくことを感じる事ができたようであり、「関わり続けるもの」サブカテゴリーとした。カードには「十人町での活動を通して、地域の方々とのつながりや、そこで生活する上で、地域福祉は生涯関わりのあるものだと感じました」の記述があった。

これら3つのサブカテゴリーをまとめ、「『地域福祉』の捉え方の変化」カテゴリーとした。

#### ⑧ 地域に目を向けていなかった私

次に、これまでの生活の中で、自分が住む地域に関心を持つことができていなかったことや、地域で生活をしているという意識を持つことがなかったことに関して、今回の一連の活動を通して振り返る内容のカード記述があり、「地域に目を向けていなかった私」カテゴリーとしてまとめた。「生活者として私は地域福祉について何も考えたことがなかった」「普段は地域で生活しているという意識は全くない」という学生たちが、そのような自分を振り返る機会を持つことができたことは大変意義深いものであると考える。これまで自分の住んでいる地域に目を向けておらず、自分の住む地域に関して何も知らないことについての気づきを得たようである。

#### ⑨ 生活者としての私の変化

「8. 地域に目を向けていなかった私」から、今回の活動を通していくつかの変化がみられる。これを「生活者としての私の変化」カテゴリーとまとめた。サブカテゴリーは、「自分の地域への関心の芽生え」「防災意識の形成」「支えられていることへの気づき」「私たちにできること」

である。

「自分の地域への関心の芽生え」は、十人町一の組自治会の取り組みを学び、「自分の地域はどうか、自分の身の内の地域はどうかと、身のまわりの福祉というものに目を向けるようになった」「十人町での活動を通して、私が生活している地域の希薄化を実感することができた」「自分の住む地域はどのような活動が行われているのか知りたいと感じたから」等のカードからまとめられ、自分の住む地域に関心を持つようになったという変化が学生にみられた。

「防災意識の形成」は、活動を通して、自分の住む地域には防災訓練が実施されていないが、もし災害が起こった際にどのように地域の中で対応していけばよいのかを考え、自分の地域の避難所を知らないことに気づき、「普段あまり意識することなく生活していたが、十人町での活動を通して、防災について考えるようになった」というカードが示すように、自分の地域に関する防災を考える機会となったようである。

「支えられていることへの気づき」は、みのり会含む十人町一の組自治会の方々が、互いに助け合い生活されている姿から自分の生活を捉え、「自分が地域で支えられて生活していることが改めてよく分かった」という気づきにつながった。学生という立場において、日常生活で「地域に支えられている」と実感する機会は少ないと思われ、貴重な気づきを得ることができたのではないだろうか。

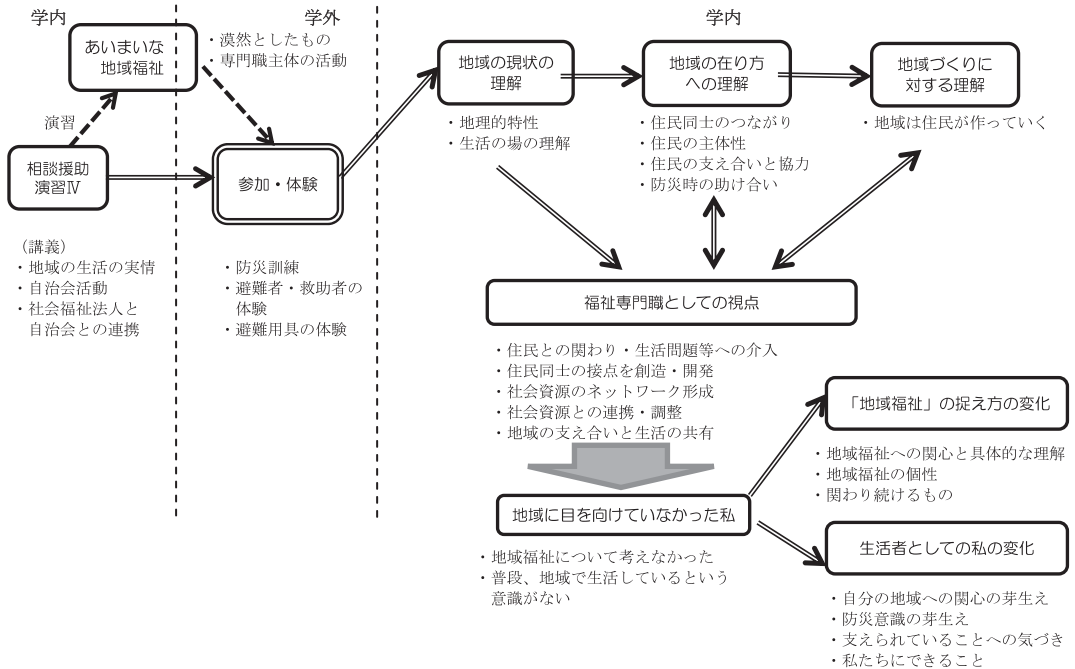
「私たちにできること」は、十人町一の組自治会の活動を知り、自分の地域やこれまで地域に目を向けていなかった自分自身を省みて、「私たちにできることは何か・・・」「また、そういった地域にできることはないか考えるようになりました」「若い人たちが地域の中で活躍できるような活動を考える機会になったからです」等の多くのカードが集まった。地域において自分に何ができるのかということを考えることは、学生が生活者として、地域の一員であるという認識を持つようになったということではないだろうか。

#### 4. まとめ - 学生の学びの深まり -

本稿においては、すでに述べたように本学における相談援助演習Ⅳでの活動に関して、学習主体であった学生への質問紙調査の回答の分析結果を質的に分析した結果、大きく9つの学生の変化を表すカテゴリーに分けることができた。カテゴリーは、「参加・体験することによる学び」「地域の現状の理解」「地域の在り方への理解」「地域づくりに対する理解」「福祉専門職としての視点」「あいまいな『地域福祉』」「『地域福祉』の捉え方の変化」「地域に目を向けていなかった私」「生活者としての私の変化」である。これらの各カテゴリーとサブカテゴリーについて、活動を通じた学生の学びの変化等を中心に考察を行った。これらのカテゴリーの関係性を示したものが、図2「学生の学びの深まりの構成図」である。

カテゴリーの内容を総合的に見ていくと、当初、学生は「地域」や「生活をする」、「住民の支え合い・助け合い」といったことについて、あいまいで漠然としていた状況にあり、ここに教育

図2：学生の学びの深まりの構成図



における「地域」の伝え方の難しさや、学生の理解の浅さが課題として見受けられた。

しかし、今回の活動を通して、実際に十人町一の組自治会の皆様の生活そのものを体験し、活動に主体的に参加する中で、学生は日常の生活において目を向けてこなかった、自分が住む地域への無知に気づき、それをきっかけに自ら内発的に地域に対する関わりについて意識化できたといえよう。この点については、学生の大きな学びと成長につながったと考えられるのではないだろうか。今後、学生の自発的な問題意識や主体的な活動等を支えていくことができる教育内容と教育指導体制を整備していくことが、ひいては社会福祉士という専門職養成の質を向上させることにつながると思われる。

なお、本研究は、平成25年度長崎純心大学学内共同研究「社会福祉士養成における相談援助演習・実習指導の教材開発及び教育プログラムの構築に関する研究」(研究代表：飛永高秀、研究メンバー：尾里育士、大杉あゆみ、栗原拓也、吉本知江子、松永公隆、山頭照美)の一環であることを付記する。

【謝 辞】

本研究において、活動の掲載につきましてご理解くださいました、社会福祉法人みのり会、長崎市十人町一の組自治会の皆さまに心より感謝申し上げます。

### 引用・参考文献

- 萱間真美（2007）『質的研究実践ノート研究プロセスを進める clue とポイント』医学書院2007年
- 正司明美・石原弥生（2013）「ソースあるワーク演習教育と地方行政課題のコラボレーションモデル 高次脳機能障害支援事業『やまぐちりハビリの会』の運営を通して」『山口県立大学学術情報』第6号2013年
- 飛永高秀・栗原拓也・藤岡知江子他（2015）「相談援助演習の展開における地域福祉の理解 フォーカスグループインタビューによる実態把握」『純心人文研究』第21号
- 西川ハンナ・森恭子（2013）「社会福祉士養成における総合型地域演習の在り方 東日本大震災における越谷市の被災体験に関するヒアリングを例として」『生活科学研究』第35集 pp.183-195

（2015年10月29日 受理）